

高原 淳の

北海道

来るべき未来を見つめて

第30回 須藤 隆昭氏

- (株)あんずカンパニー(杏園堂鍼灸院)代表
- (社)日本アロマ環境協会認定アロマセラピーアドバイザー



淡いピンク色の外観が印象的な杏園堂鍼灸院。震災後は太陽光発電を導入。屋内はLED電球への切り替えが進む。
杏園堂鍼灸院・アロマセラピースイートバジル
釧路市愛国191-5717 TEL.0154-39-2589
<http://anzu946.com/>

釧路から、なぜ「元気スロウ」が誕生したのか？

この夏発行された「元気スロウ」という冊子をご存知だろうか？ A5判52ページ。体裁は「チビスロウ」と同じ。デザインもほとんど一緒といってよい。ただし、こちらは町のガイドではなく、「コロナとカラダの健康ガイド」。奥付を見ると発行は「杏園堂」と書いてある。そう、この本は須藤隆昭さん率いる杏園堂が企画し、スロウが取材・制作を担当して完成した、コラボレーション本なのだ。

業家同友会だったが、別な勉強会や講演会でも顔を合わせるようになり、気づくと同友会で僕と同じ立場、釧路支部の経営指針委員長になっていた。

プレゼンが上手でやけに活動的な鍼灸師……。そんな第一印象だったのだが、何度か話を聴いているうちに只者ではないことがわかってきた。須藤さんには鍼灸師の他にさまざまな顔を持っている。しかし、広範囲にわたる活動は決してバラバラなものではない。ある理念によって統合されているような気がしたのだ。

我が家で一緒に食事をするようになった。そこで出てきた話は「本をつくりたい」というものだった。すでに須藤さんは本づくりに関して素人ではない。タウン誌をつくる会社に在籍していた経歴を持つているし、杏園堂設立後も、広報誌やニュースレター、さらには地域のガイドブックまで自前でつくってきた人。だから、当初僕はてっきり印刷の相談なのだと思っていた。

「第三者の視点から健康についての本をつくりたい」。そんな話をいただき、ようやく状況を理解した。スロウ編集部が取材・編集力が問われるような本を須藤さんは求めていたのだ。

この時点ではどのような本にするのか、まだ曖昧なイメージしか描くことができなかった。お酒と料理でひらめいたのか、「チビスロウにしよう」という言葉が誰かの口から飛び出した。だが、話は盛り上がったものの、本のコンセプト、費用、編集部の体制など課題はたくさんある。酔いが覚めたら改めて考えよう……。僕は気軽に構えていた。

こうして大きな方向性は定まったものの、細部はしばらくの間、ぼんやりとしままだだった。話を前に進めるべく、須

「住んでクスリになるマチ」釧路から、
元気とやすらぎのツボを伝え続けていきたい



藤さんは再び帯広にやってくることになつた。本来なら僕らが釧路へ出向くべきなのだが、彼らの行動力のほうが勝っていたようだ。

細部を詰めるための打ち合わせ…というよりも、須藤さんからのプレゼンがメインの会議となった。ここでスロウ編集スタッフ全員、ガゼンやる気のスイッチを入れられることとなる。それほど須藤さんのプレゼンは僕らの心の奥深くに訴えかけるものだった。杏園堂の理念、そして須藤さんの描くビジョンが伝わった。目指すべき方向をスタッフ全員が共有した瞬間だった。

世界の探検から、カラダや健康の探検まで

そもそも須藤隆昭さんとはどんな人物なのだろう？ 僕がこれまで勝手にイメージしていた鍼灸師の姿とはずいぶん異なっている。

須藤さんは釧路生まれ。子どもの頃から探検にあこがれ、学校の先生にも「探検家になる」と話すほどだったという。大学では探検部に所属。本物の探検家さながらに世界中を旅する。1979年には9カ月かけてユーラシア、アフリカ24カ国を巡ったという。この経験が須藤さんの世界観を大きく広げることになったようだ。1981年にはバングラデシユ難民調査を企画。最貧国の状態を知ると同時に、ボランティア活動の必要性を感じ



写真上/ケニアメディカルキャンプ。HIV陽性者の治療を行う。
写真中上/キャンピングカーを改造し、震災ボランティアとして陸前高田で出張治療を行っている。
写真中下/明るい光が差し込む杏園堂鍼灸院。
写真下/鍼は髪の毛ほどの太さ。痛みを感じることはまずない。

じるようになっていく。

社会人になってからは一時期編集社に身を置き、取材で帯広にある東方鍼灸院と出会う。このことがきっかけで、洋的なものや鍼灸に対して急速に関心を深めていったという。北海道鍼灸専門学校で3年間学び、台湾や中国へ留学。さらにニューヨークへ渡り、ジョン・レノンも通っていたというセラピーサロンで働き始める。探検家らしい、世界を股にかけて行動力。帰国後は再び東方鍼灸院で修行を積み、1991年釧路市光陽町に杏園堂鍼灸院を開設（現在は釧路市愛国）。こうして鍼灸師として力をつけながら、「知れば知るほど、臨床を重ねれば重ねるほど、鍼灸はおもしろい。人間の回復力はすばらしい」との思いを須藤さんは深めていく。

たようだ。なぜ人には免疫力や自然治癒力があるのか？ 人間の力を超えたものと偉大な力、宇宙エネルギーのようなものが働いていて、鍼灸は西洋医学だけでは解明できない人間の奥深い世界とつながっている…。「どうすれば人は健康になるのか？」という謎に向かって、須藤さんは今も探検を続けているのだ。

日本のすばらしい鍼灸を多くの人に知ってもらいたい

そんな須藤さんにとって、何としても打破したい壁（目標というべきか？）がある。それは、「日本人のわずか7%しか鍼を体験したことがない」という現状。中国では国家ぐるみで鍼灸治療を保護、育成しているし、アメリカでも代替医療が盛んで、日本よりも鍼灸は深く浸透していた。外国で自己紹介する際「acupuncture（鍼術）」と言うと、たい

ていの場合「おもしろい仕事やってるね」という反応が返ってくるそうだ。逆に、日本のほうが鍼に対する認知度が低い。日本の鍼灸は世界的に見て高いレベルにあるというのに…である。

鍼灸は人間の自然治癒力を高めるすばらしい技術。鍼は痛くないし、お灸は「熱い」ではなく「温かい」もの。実際に僕も須藤さんに鍼を打ってもらったが、鍼を打られたことにも気づかないほどだった。それもそのはず、杏園堂で使われる鍼は髪の毛ほどの太さ。痛みを感じることはまずない。体の不調を感じる部分ではなく、遠くのツボを使いながら体全体を整えるのが杏園堂の治療方針だ。

鍼や灸に対して過度に心配性になってしまう日本人にもっと本当のことを知ってほしい…。そんな使命感から須藤さんは「探検家」だけではなく、「伝道師」としての活動を活発化させていった。



杏園堂鍼灸院とスイートバジルのスタッフ。須藤院長をはじめ、みんな弾けている。

杏園堂のホームページを開いてみると、その情報発信力にちょっとビックリするかもしれない。院長である須藤さんやスタッフのブログ、杏園堂の広報誌「あらず通信」、新聞や雑誌への寄稿文、学会発表やレポート。そして、須藤さん自身は「北海道独断情報誌」「むい」を発行してしまっただけでなく、文章力を持っていて、独特の筆力を持っていて、読み進むごとに引き込まれていくようだ。

須藤さんの使命は鍼灸師として人々の痛みを和らげるだけではない。食事や運動、セルフケアのアドバイスなど健康全般にわたる。また、須藤さんのパートナーである加代子さんは杏園堂鍼灸院内でアロマセラピーサロン、スイートバジルを運営している。鍼灸とアロマの相乗効果で体も心も元気な人を増やしていくのが須藤さん夫妻の目指すところ。

ボランティアの診療活動がスタッフを成長させる

そうした鍼灸の啓蒙活動と並行して、須藤さんが力を入れていることがある。それはボランティア活動だ。

きっかけは、エイズの無料診療活動を行っているイナダ・ラング・エイズ研究財団（イルファア）に出会ったこと。2003年、須藤さんは医療スタッフの一員として、ケニアの首都ナイロビへ向かう。ここでナイロビのスラムの実情を

目の当たりにすることとなる。「これは遠い世界の問題ではない」。そう実感した須藤さんは、ボランティア医師として毎年診療活動に参加している宮城島拓人さん（釧路労災病院副院長）とともにイルファア釧路を立ち上げる。以来、毎年のように杏園堂のスタッフがケニアでのボランティア治療に参加するようになった。

ケニアでの滞在は1回につき10日間ほど。ナイロビの近くに古民家を借りて、仮設キャンプのようにシートで仕切りを作って鍼灸ブースを手作りする。HIV陽性者に対して鍼をする際は、特別に注意を払って刺鍼・抜鍼する必要がある。言葉も違えば、体格も日本人と異なる。日本での治療よりも格段に緊張感が強いられる。治療に当たるのはHIV陽性者ばかりではない。年に一度の治療を求めて大勢の人がやってくる。「ケニアメディアカルキャンプ2012レポート」を読むと、「この日は51人に鍼をした」と書かれていた。

こうした過酷ともいえるボランティア活動を杏園堂のスタッフは代わる代わる体験している。それも飛び切りの元気さと笑顔で。

「ケニアへ行ったスタッフは、一皮むけたように成長して戻ってくるんです」と須藤さんは言う。

活動が大変なものであることは想像に難くないが、それゆえにチームの結束力



写真上/毎年9月に行われる杏園堂祭。
写真中/院内はカフェにいるかのような雰囲気。
写真下/アロマグッズやオーガニック製品の販売も。

や現地の人々との交流、そして言葉に表せないほどの達成感…。日本にいたら経験できないような貴重な何かを獲得して日本に戻ってくるのである。

そうしたボランティア活動を数年間続けてきた2011年。あの東日本大震災が日本を襲った。7月、「自分にできる

ことはないか」と陸前高田市を訪れた須藤さんは、目を疑うような惨状を目の当たりにする。須藤さんは必要最低限の資材を手に入れ、テントで即席の治療院を作り上げた。極度のストレスを抱えた被災者たち。鍼灸によって少しでも痛みや苦しみが和らげば…。そのためには一度限りではなく、「継続的なケア体制を作らねばならない」との思いを強くする。

須藤さんの熱意はほどなく人を動かすこととなった。移動鍼灸院として活用できるよう、キャンピングカーを友人から譲り受けることになったのだ。この車は「さどわ号」と命名。ふだんは一関の駐

車場に置かれ、月1回程度の頻度で鍼灸ボランティアが派遣された際、陸前高田のスーパーマイヤ駐車場前で無料の鍼灸院を開く。ちなみに駐車場所や鍼灸院開設の場所は同友会会員企業の好意によるもの。

鍼灸ボランティアには、杏園堂スタッフの他、杏園堂から独立した元スタッフが加わることもある。陸前高田へ行くためには当然旅費がかかる。そうした費用は健康教室やチャリティーイベントなどを行って捻出するのだという。これまでにのべ500人も被災者を治療してきたそうだ。「1000人を目標に継続していきたい」と須藤さんは語る。

ケアにしる、震災復興の活動にしる、須藤さんの「ココロとカラダの健康」にかける情熱には並々ならぬものがある。それは実際に現地へ赴き、自分の目で見て、経験したからに他ならない。須藤さんは、やはりどこまでも探検家なのだ。

「住んでクスリになるマチ」 釧路の情報を発信していきたい

杏園堂の創立から23年。須藤さんの願いであり、目標となつてきているものは「元気でやすらぎのある社会」だ。そのためにはボランティア活動も大事だし、同じように地元釧路での本業も大事であることはいままでもない。

須藤さんからおもしろいフレーズが飛び出した。それは「住んでいてクスリになるマチ」。僕はすぐにピンときた。釧路という地名の語源はアイヌ語の「クスリ」だとする説がある。「クスリ」は薬または温泉を意味する。釧路同様、屈斜路も「クスリ」に由来する地名だろう。

改めて「元気スロウ」の表紙を眺めてみる。「釧路から元気とやすらぎを発信」というサブタイトルが目飛び込んできた。釧路はすでに「クスリになるマチ」といって差し支えないのかもしれない。僕は元気スロウの取材を通じて、数多くのクスリになる場所やクスリになる人に出会ってきた。また、評判のいい医療機関が多く、そのために遠方からやってくる人も多いのだという。釧路は地名の由来の通りのマチなのだ。

近年の日本は「異常気象」が異常ではなくなり、常態化しつつある。最高気温40度を超えるような地点が続出し、気象の面から捉えれば「元気でやすらぎのある社会」ではなくなりつつある。これか

らの釧路は「アジアの避暑地」として注目されていくに違いない。都市としての十分な機能を備えながら、目の前には広大な釧路湿原が広がっている。自然に親しむにも、アウトドアレジャーにも事欠かない。ヘルスツーリズムとしてのポテンシャルも高い。そのうえ、真夏でも25度に満たない快適な気候。帯広に住んでいる僕らでさえ、「夏は釧路で過ごしたい…」と思ってしまうほどだ。課題があるとすれば、長期宿泊できる場所が少ないという点だろう。

須藤さんは自身のことを「カラダとマチのツボ探検家」と称している。カラダのほうは鍼灸という本業を通じて、そしてマチのほうはさまざまな情報発信活動を通じて、これからも探検を続けていくに違いない。



須藤 隆昭 (すどう たかあき)

1959年釧路市生まれ。立命館大学在学中、探検部に所属し、ユーラシア、アフリカ24カ国を旅する。1998年「パングラデン・ユニタス」を企画。卒業後は帯広の編集社に就職。取材で東方鍼灸院に出会い、鍼灸に目覚める。北海道鍼灸専門学校入学、鍼灸師の国家資格を取得。さらに、台湾、中国へ留学。ニューヨークのセラピストサロンで働いたのち帰国。東方鍼灸院で経験を積み、1991年釧路で杏園堂鍼灸院を開院。国際子云での発表や健康雑誌への寄稿も多数。